

〔一八〇〕 此等諸方に散ずるに至りし回鶻の諸部なるものは、本來回鶻部を構成したる（藥羅葛・胡咄葛等兩唐書に回鶻の九姓として記さるゝもの）九部と更に之より分出したるべき諸部を始め、回鶻に屬したる所謂鐵勒九姓部をも含みたることは疑無く、而して恐らくは此等以外にも當時回鶻の下に在りし諸部の混入するものも少からざりしなるべし。

〔一八一〕 此の繫年錄と曰ふは恐らく前に引きたる後唐獻祖紀年錄と曰ふものと同一なるべし、繫年錄には王子烏希特勒とし後に册して烏介可汗と爲せりと記せり、恐らく烏希も烏介も同音の異譯に過ぎず。

〔一八二〕 此の記事によれば烏介を立てしは天德に在りし唃沒斯等なるが如きも、其の事實に非ることは後に述べる所によりて明かなり

〔一八三〕 錯子山の名は通鑑會昌元年二月の條に註附せる後唐獻祖紀年錄に烏希即ち烏介特勒が「至錯子山、乃自立爲可汗」と見ゆれば、新唐書は或は之に據りたるならんか、通鑑が同處に引く所には「據李德裕書、錯子山東距釋迦泊三百里」と見ゆれど、今其の位置を審にする能はず、但し之に似たる名を求むれば、唐書地理志に載する道里記に、中受降城より鶻鶻泉を経て回鶻衙帳に至る道途に於て鶻鶻泉より「又十里入磧、經鹿山・鹿耳山・錯甲山八百里、至山鷲子井」の文あり、此の錯甲山と曰ふもの、或は錯子山にして、甲は子を誤りたるものには非るべきか、此の如きは勿論一個の推察に過ぎざれど、茲に錯子山と曰ふものが回鶻の本據より南方に當り、然も塞外の地なることは固より疑無し。

〔一八四〕 即ち通鑑開成五年冬十月丙辰の條に「天德軍使溫德彝奏、回鶻潰兵侵逼西城、互六十里、不見其後、邊人回鶻猥至、恐懼不安、詔振武節度使劉沔、屯雲伽關以備之」と記せるが如きは其の一例なり、新唐書回鶻傳には此の事件を以て烏介可汗の公主を擁して塞上に至りし時のこととすれど、此の如きは年代の上よりするも許す可らざる所なり。

〔一八五〕 舊唐書本紀が前記（二三九頁）の如く、會昌元年八月の條に「烏介可汗遣使告難云々」と記せるは、思ふに此の事實を誤りたるものに外ならざるべし。

〔一八六〕 新唐書回鶻傳には烏介が公主を擁して南に來りしことを記せる續きに「邊人大恐、進攻天德城、振武節度使劉沔、屯雲伽關、拒卻」と記せども、此の事の誤なるべきは、既に通鑑が會昌元年十二月の條下に註せる所なり。